



山ノ井

早九号

中村俊定文庫  
文庫 18  
46  
4





山と井冬部

紙貞集

徳文庫

初冬

初冬 小春 亥子

院定藏

永田庫

十月とくまれ月といふより  
後、何れとほしとや世俗セウキョクよ  
いと物よりらるるの神カミより  
出デる乃國クニよりいまだとや  
いふ神カミよりいふと神カミ氏子  
とまればよからしれうこ  
すともうせさびしき  
氣キ又又乃宮ミヤのぬき  
降フる所トコロぬきをあらし  
風の神カミを月ツキよりらるる

中村院定文庫



本乃葉ととらわらぬ葉れら  
 了わらぬ葉能若月やしらん  
 霜柱をたたくもあそびと  
 後月あといひあし一た紙  
 糸月髪糸月なるとさるん  
 りりらりてとつり。小春  
 ハ子に替へて夫らとらと  
 十月めりりらむとも。後  
 乃肉にらいづられあどと  
 りひ。又りりむとあどく  
 ひしき。初雪もやうく  
 とけてもたにらふれとけさ  
 あどとつらぬゆる

何あはらうとも十月かたひ小春  
 霜月乃あつたつあそび  
 十月といふあやまらぬ神  
 々ふらうもあはらうあそび  
 霜柱をたたくもあそび  
 十月乃言れ日餅をばらりて  
 くらひゆれん。子秋やらあ。病  
 をあはらとらりあそびあり  
 て。夫肉にといひら。勢なまひ。  
 からんやあくくりそあて。  
 菊あまきたのどこきこせ  
 いてふとららそへて。それく  
 あそびたあそびあひ。



志もが志もいにと勢も志  
新つておらふといふうすむ  
福とくおんていどがやう  
るりもつきぬあどこや  
かきーゆる

志よとせむ志よあん言子餅  
懐乃何とらんどの志もいけ集

落葉

朽葉 木の葉 落葉  
木の葉のぬ このいろ

木の葉を物 らる らる  
落葉社といひてゐる箱  
らんぬれあのかさきさ  
乃うんきいあどといひけ

木乃葉様といひてゐる木から  
おつるたとくをよせよ  
葉天物といふよは。物  
よかつーたかーあを  
とろよ山里乃るもけ  
あく。谷川の流すことひつ  
き。森も林もあつらる  
りーふ。又木がー  
女乃と葉をよせ。落葉れ  
文の名残を風乃らく  
さりーん申る何りあま。  
うら知ふあらく。新葉  
あ



冬らしぬお花も風がさす〜又  
 猿も木がからむなを木葉が  
 木の葉も川流のうづや猿のこけ  
 庭にふるとがれ落葉ひが山を保  
 いこまぬ海もともなふもらふ糸を結

時雨

忘れぬあわ初〜これ  
 村町ぬ 町ぬの茅 夕町ぬ

さよ〜これ 町ぬぬ 夕町ぬぬ  
 よこ志重と 夕町ぬ 夕町ぬ  
 とちのさ ちのさ

忘れぬはえはらぶい先たあく  
 くら〜ととるれん〜ととる  
 と是〜り。あるとたも〜ん。

ありらもも〜あり〜ぬ氣多。  
 是どやに通りゆ〜と海ふ  
 ととらひ〜〜月い〜と  
 さよ志重れ。町ぬ乃あわや  
 下町ぬあ〜とほ〜と縁。  
 めが海と〜り〜り〜と。  
 地獄め〜り。あ〜り。と〜  
 先〜りあ〜の〜と〜と  
 と〜とめだが海〜と〜り  
 よめ〜り〜〜り〜と〜と  
 雪中〜り〜と〜と〜と  
 と〜と。う〜と〜と〜と  
 海〜と〜と〜と〜と〜と



足んや花をり時多はあがりか  
あうはがふや志らぬあうか

冬月

月の夜 さゆる

らえんさる 孰る心あまおろひ  
あふりしゆら孰れ又散乃  
あんとし月と夜しき物  
としの夜志女れあさうに  
もふがへ 臘月としひけ  
て灯乃光あもしひあ  
ゆれ

ととあもよき 臘月あふり

冬月乃文りりる人あ

あふり

ひきさる月 東冬なり志雲

霜

霜花 八重も 霜乃花

霜柱 霜乃剣 霜乃花

霜乃橋 霜乃れ 霜乃れ

あういよよ さゆる こゆる 滝

霜乃花としひてはこゆる

ぬあふ花あもよき日孰

りしもあき物散乃あふ

にもくくへ 霜柱としひ

てふかきうきれ橋ぐいふ

と昔ひびく 滝つき 壺あ

ととつひあはれ 霜花あ



一 一 えらりして月れきり  
 とさむきざら風とこれ  
 けりて福びえせとあくる  
 じん志づらありきり  
 ひわうづらも雲の鈕乃  
 志まごに功やせ。こちて  
 づらと雲なれとて  
 ね乃あづらも雲風をち  
 くれあど

清ね清ひく福あり志むく  
 雲かかみつき堂や雲らり  
 かき雲乃橋あられや雲柱  
 鬼神ともかかみつき雲雲雲

要法ありて

文や詩乃つき枝木を雲らら雲

法ありて

大いさく雲乃けらるる雲雲雲

雲散 雲われちちちとて

何れ板ひきり根條  
 うへあどたきりてあれるん  
 じんかきこらるてあり  
 けりやうらな雲乃つらんと  
 雲志くとりて雲らや志  
 雲ねと雲散とて雲雲



きよ又何れれ乃そけきも  
りひあし何れれ金<sup>がま</sup>物も  
けしぬゆる

盃やさびがぶる来にわくれ酒  
やたさうや竹換炮乃わ何れ

わくれ壺をこく

ふけきあそんりあうや壺<sup>き</sup>壺

たきうそや湯むたがし壺<sup>き</sup>壺<sup>き</sup>壺<sup>き</sup>

霽 雪ころきれ

こぞれハゆやく湯によせつ

篠乃美系<sup>き</sup>松葉とさうそ<sup>き</sup>や  
とひひも<sup>き</sup>。天<sup>あま</sup>あ<sup>あ</sup>と

と酒壺とともんかせり。又

と花新とつひ河あもそん

海きあともつひく

何のりにまうるとそ

る海初や<sup>き</sup>ん<sup>き</sup>あ<sup>き</sup>え<sup>き</sup>そ<sup>き</sup>れ<sup>き</sup>

雪 初雪乃見系 雪ころき

雪乃れしけ乃花かこひく雪

衾雪ころき雪 ころ雪 ころ雪

雪の山窓の雪 雪汗雪女 雪佛

うらうらつらつらつらつら

雪指 富士かひうね 雪指

初雪の末に餅乃るり。雪に



心乃ちあきこきしんやうり。  
 めぼくくうりーひあ。  
 竹ふつくる福ぬにうり  
 城をやく。松乃こぞあれ  
 志く吾ふれらるもつは  
 なるゆりき。らひこの  
 登とくりー谷と埋りて。  
 山ち乃鬼ハあさとれつと  
 之詠きしーを歌ふ。  
 やせ小僧ハとふよとむき  
 乃をまがひ。靴うりき  
 山が乃とたもあこつげ  
 乃吾城うらがるんをへ又

やくすこも雪とありが  
 まくと福と何らうの海  
 さぬかんあさやそりり  
 乃さしんこーれ旅人をた  
 もひやり。あせお吾をか  
 かしむる吾をづき。何り  
 く木から乃ていそあがた。  
 友をさぶねー王子歎乃  
 ちしし。巻をかげらる  
 白居易乃あること。庭草心  
 志乃さ入りーかひの志ら  
 祿をさひかまへり。は  
 まる地獄士りー作らる。



位者乃娘のふさ音源氏乃  
とわれまびあともとも  
ふひよせ程音らるばり  
音ららにのみ残さきかへ  
ぬ人志飛渡音やらんこと  
ひひと申。えりりり  
しらくとこと毎にらるる  
乃分<sup>かり</sup>程とともともは  
祿るは

かると音と行らるる音  
あふらるる音と一軒の音  
あら音をそに音ぬ音の宿  
らるる音やらんきと音

女あしとひひとらんハ  
そのふきとくりおらあり。  
とんと是にかきと音とれ  
りくさ花ふらるることき。  
ふきとらるる音とれがよ  
あしとらるる音とひもそれ  
らるる音とそれといらん  
いさう吹味ゆらんきとや

水仙花

玉葉 単紫 金盞  
銀臺

あがれ乃葉中よいらは  
らるる音とらるる音とら  
葉れをとりとらるる音



吾乃むりいんちうひく  
いたすいせんときき心  
わらふきもつね文葛と  
て作らまのせんあまらへ  
花瓶乃口をすいせんらと  
あともとり

志る紫もや花瓶の思ふ心可れ

氷

うす少 ちつ少 軽少  
ひまうしん少のれはく

うらひひまよ ちる とつ  
わら つそ

氷ははらきとつひて。空  
乃あれきうひ。知日り

ちあふるふをいひ。波乃鼓と  
ね皮とあり。流乃糸もま  
ひすひりいもあう  
きをうつね池の曇れ天井  
らり。あをれ床板とちる  
ありさ海。又舵く。乃津れ。  
鬼くう。乃きごにひんれ  
てつ。さも

氷あふるま。く。えん。れ。鏡。子  
鏡。子。乃。目。目。衣。子。乃。氷。れ  
籠。よ。さ。へ。あ。漏。の。さ。あ。少。那  
か。ん。の。う。を。れ。水。あ。國。の。氷。れ  
文字。は。え。あ。と。て。ん。ご。る。あ。う。那。一。漏



水鳥

されを海 ありて  
つらも とき くらり  
とく くらりくらり くらり  
さくならふ あり くらり  
池海 浪色

ありて けしき 乃 枕よ あり  
おとれ 座り 船を けしき  
波の 敷に 着て くらり あり  
み 登り くらり くらり 又 あり  
し くらり くらり 川の 鴨 あり  
乃 海 あり 鴨 あり あり  
くらり くらり くらり くらり  
くらり くらり くらり くらり

羽を くらり くらり あり あり

あり あり あり あり あり

あり あり あり あり あり

あり あり あり あり あり

あり あり あり あり あり

あり あり あり あり あり

あり あり あり あり あり

あり あり あり あり あり



おもしろかろうとや此の鶴の  
さうわ六つひのひがしう火鶴しんりやん

子の追加りり

志むらうふ子のひりし友衛ともゑ  
足指子あじやえいもともと鶴一葉  
わをぬらきときぎ他よる友子ともゑを

鷹

まうたうやうらうらう  
まうらふ

元とるたうま鷹 地やたう

鷹鋼 鷹叩 鷹大蛇やけ

鷹うり ちうらうさ わくめさ

すゆり まうらう 二の 野中鏡

交野

おもしろいれ乃ひらまあ

野をの者あうらおとひて

四島阿くは鷹人志あす

ひねまうらかりうりして

鷹とり志とるあせことも

乃氣又鷹大乃物あまて

元初り福ほりかきこあん

心とへ又あうら何ふ鷹乃

終鶴に何とせあうらぬ

鷹乃黒鶴とれるかり場の

ていあし都るは乃のおま

何と終無ともあうらう  
終鷹はうへともあつあぬ



侍かきまを感し一男を  
とて鳥小笑新くたふ  
り。身をかつりてこれ  
へるとす

かりがまを感し一男を  
とて鳥小笑新くたふ

埋火

炉のきこりるり火捕  
火御 ちちこらやう

を記こら子 しく 白炭

小野 池田炭

火の火のゆるりとは  
何あるとも。さうが  
わくくわかれあども  
うら乃火乃しきり

このまをよころもれら  
顔乃志んをれら  
ま。又口まりのの  
ひくくわらり乃火  
やし。志んすま  
うをわやし。炭  
名に死あし。羽  
がひとひ。火  
に月ひるる人  
ぬぬ。火  
あまた。せ  
あり



神楽のあはれす人

せうはるやきうる志る中炭乳  
ふておれも胆ゆるお火捕り  
ちぐさの思ふことれがひふ  
すことりや凡びうる人なれつきを  
おまがる百重具袋すまがら幸和

神楽

里加く内約不 庭火  
揉拍子 拂 幣 針

韓神 やうて 星 朝露

倉下敷 酒夜 鈴 とひりし

和琴 とも 福き 三子

神楽ハあまてるおやん  
云乃盤<sup>ま</sup>戸<sup>と</sup>よ幽<sup>く</sup>居<sup>る</sup>れん

六合とこやととあうて

らるひあ乃とらなるり

けり時天<sup>あま</sup>鉦<sup>かね</sup>女<sup>め</sup>れ<sup>れ</sup>神<sup>かみ</sup>かつ

こまきさうけ竹系<sup>たけ</sup>飲<sup>み</sup>醍<sup>り</sup>

乃木紫<sup>むら</sup>残<sup>り</sup>草<sup>くさ</sup>り

やこととらあど

被<sup>か</sup>盤<sup>ばん</sup>乃<sup>の</sup>あまて神<sup>かみ</sup>舞<sup>ま</sup>

とあいたまひをれんす

あんらいつとあて

日乃神<sup>かみ</sup>世<sup>よ</sup>り何<sup>なに</sup>れ

あひん志<sup>こころ</sup>散<sup>ち</sup>とを志<sup>こころ</sup>ろく

乃つれんあ乃<sup>の</sup>神<sup>かみ</sup>うち  
悦<sup>よろこ</sup>ひあひつとれあひと



道なり 阿波被阿那波  
 志呂とれりいまひ言ふと  
 名。されんれもて志らま  
 いらどののけり志らま  
 ひあーいさぬがうすめ  
 邦からうまぬが阿りさ  
 海あといひさそ。又ここ  
 やととれして阿りけり  
 うふらぐん。船くくぐり  
 相のきりーいりさぬを  
 志きさあどまべー  
 若て白きがうとぬら  
 子句才十りー

とこや三層阿り志言はれ神楽祭

探歌子神楽をとくり

きこひ坐につくやすぬ神楽祭

御火焼 祇園 八所御舞  
 今更かましれ御火焼

あつうまつり子祭 二まゝえん  
 霜月乃あやけけ彼うら  
 れ庭火とまねふとくや  
 子。あつうまつりとは八日  
 乃目ありれあやけけ  
 かふおの徳穢人れけあて  
 いんひはは。あつれ飯  
 年ゆら。子祭い子れ日。大黒



の地知さけりしうちう  
 つく。意義法をともまつり  
 竹まげを曉りし。陰陽師  
 乃らりり。何りし。あびと大  
 馬に能像をいつひこめて。  
 中あり倍おは。二ありれ大根  
 そへて何人何る。祇園ハむ  
 まの月。れ水社あなり。以  
 してよつ。民。下系乃。氏子  
 と。と。ち。の。さ。ぶ。こ。う。と。  
 町く。り。か。ま。い。と。入。つ。  
 大。た。ま。た。ま。き。も。を。味。も。て。  
 何。や。う。あ。り。又。時。の。ら。う。

物と。と。と。こ。ま。い。と。ま。り  
 何る。の。海。と。や。ハ。十。八。日。佛  
 靈ハ十八日。水。ま。つ。り。れ。日。よ  
 何。れ。ん。ん。り。す。べ。て。お。く  
 何。り。り。ま。う。ぶ。と。那。乃  
 何。り。け。ハ。何。と。る。り。さ。れ  
 ん。こ。さ。大。乃。ひ。う。り。を。和。光  
 乃。れ。り。り。り。の。勢。又。あ。い  
 が。う。れ。あ。き。は。く。る。ほ。ん。じ  
 と。び。さ。り。あ。る。ん。ん。ん。を。も  
 り。む。果。報。を。ね。ま。つ。り。あ。ど  
 う。へ。て。も。り。り  
 ね。ま。つ。り。り



少きまもる家門つち大根重正

### 年肉立春

年乃肉よりくるるは  
 元乃まふに如きもや如  
 嘗の聲もやうく少く  
 むちであるうき又  
 新瑞乃梅ははなとや  
 らぬと梅の香り餅の  
 らるの志く新くふんれ  
 とありひと乃ううん  
 てくるとも。年乃うん  
 少きまもるもなり

年乃肉少きまもるは

わびれ喜やまづるは肉哉

### 歳暮

年乃うん 晩年

歳末 除夜

大はこなり

とくこく 暮か ともやひ

やくおと

たや流ごこなりハ一年

くそるれハ目くれ新文

りハはあてあおとあり

日く救そらん年成り

あうく年ハせくもせ

まらひゆくとくれや



まいさしてとたあしうぬん  
 どんあといひ又さきか  
 もとふれををうられ不  
 うりともれのがむ鏡乃  
 わもく鹿とちもつあて  
 えんるるやうらうぶわり  
 さ海がやうらがりさうと  
 たてまつゆづり葉とて  
 けりきせきそら乃やう海  
 しく傷残しむ乃せう  
 ふやうゆきさらぶあやち  
 乃乳文らん乃きぬとぶ  
 けりひ。正月お純やうく

ぐりがまれこけらめやう  
 乃物箱いんばあどてらし  
 せく。まどくれ家く  
 乃ちうけ。海日まれよふび  
 むく。やうらうにゆき  
 づり人ころていあどと  
 こそんりうらてりひ  
 あんべー

鹿とちもつきまらぶあつた  
 すくまの海くれ行のを記か  
 へく海まわらぶつたはま  
 こえらるらつこも葉とちりや  
 志りれわりのあつたあひつらひあつた



勢乃志はらうらや月を雲に  
 雲に志はらひ油やまぬう休甫  
 来も逢ふはれをわらふ志は良保  
 ゆき志うよわらうぞ世師を守榮  
 昔分ハ初乃町のあらう  
 たり。又衆れ天祚よまふ  
 づく。とくらこらひさう  
 ひもてきさつ。家内乃加  
 こあう志も是さうりあ。衆  
 よつれんむらうこらうの  
 ちるといひく。せと門志  
 此産あどかさくはうて  
 卵もよはううれうら

とのしきあえらる鬼ハ  
 目つきとせさうかし  
 うらふハあひと棚大こく  
 柱乃らまぐに。灯燧ひ  
 あくきさく。沉香あとかわ  
 らは。あやうられさやらふハ  
 明日のあれど地下う  
 こらひあめさうりて。穢  
 うら鬼ハそととらうち  
 らや。又正うよらひと  
 色彼中あさうせかうん  
 ついさうとらうりひら  
 あやうそあさあづらう











之よりとてあつて戸  
 ありき白跡をかきぬま  
 まつらぬもかゆしおひ  
 へてうとき人のまめ  
 にまらふあつてあま  
 ー

正保甲戌一陽天



